

1920年代若い女性の理想像

—『婦人グラフ』に見る令嬢たち—

高月 智子* 能澤 慧子**

The ideal type of young woman in 1920s
— from "Ladies' Graphic" —

Tomoko TAKATSUKI, Keiko NOHZAWA

1. はじめに

日本女性の洋装化の背景としての和装における美意識の推移に関する研究の結果、日本画に描かれた女性のプロポーションは明治40年代から昭和10年ごろまでの間に明瞭な変化が起きたことが把握できた¹⁾。そこから筆者は新しい、いうならば欧米風と思われる美意識が和装の中に明らかとなったこの期間の、現実の女性たちの生活様式や価値観、また西洋文化の影響の状況に興味を抱き、当時の女性が愛読した雑誌に目を向けることにした。

その中でも身長に占める下半身部の長さの平均値が最も大きかった大正末期から昭和の初期、すなわち西暦の1920年代は、欧米では第一次世界大戦を契機として女性の社会進出が進み、自立した、あるいは解放された女性、すなわちフランスのギャルソンヌ、英語圏のフラッパー、モダンガールなどの言葉が流行した時代に当たる。この1920年代後半の5年間に我国で出版された雑誌『婦人グラフ』の調査を行なった結果、当時の上流階級の若い未婚女性、すなわち「令嬢」像の一端を捉えることができた。

2. 雑誌『婦人グラフ The Ladies' Graphic』

『婦人グラフ The Ladies' Graphic』は、大正13年（1924年）5月から昭和3年（1928年）11月まで、国際情報社より出版された女性向の月刊誌であり、それまでにない豊富な図版と、当時フランスで刊行された最後の粋を尽くしたシックな高級ファッション誌『アール・ゲー・ポータ



図1 『婦人グラフ』 第五巻七号

*家政学研究科 博士後期課程3年 **服飾美術学科

Art Gout Beauté』²⁾をそっくり真似した白黒の縞模様の細い帯で縁取った表紙デザインでよく知られる。もっともこのデザインは当時のフランスに大流行していたアール・デコ様式の、そしてさらにはジャポニスムの一例であり、『婦人グラフ』の表紙はいわば「粋でいなせな」日本美を逆輸入した形である。

縦34.5cm×横33.0cmの大版で、各号およそ38頁から40頁であり、その構成はその目次のスタイルに従えば、三色及び二色刷り10頁前後、写真版10頁前後、オフセット及び三色版16頁、写真版10頁前後である。全頁が図版、または図版と文字から構成されており、当時としては極めて贅沢な造本といえよう。

値段は一部1円、送料2銭である。『週刊朝日』編の『値段史年表』³⁾によれば、昭和5年の朝日新聞1ヶ月の購読料(朝刊、夕刊併せて)が90銭、大正13年の『週刊朝日』が一部12銭、大正12年の『中央公論』誌がちょうど1円である。また大正15年に白米10kgが3円20銭、国家公務員の初任給が75円である³⁾。現在例えば新聞の購読料は月間3,850円であるから、単純に計算すると当時の1円が現在の4,200円あまり、現在米10kgがほぼ5,000円とすると、当時の1円は現在の約1,560円、初任給が20万円とすると、同じく2,666円である。物によってその値打ち事態が変動しているため、一概には言い難いところであり、たとえば白米が1700倍にも上昇しているのに対して、『中央公論』誌は700倍程度に過ぎない。しかし大雑把に見て、大正末期から昭和初期にかけての1円は1,500円から2,500円程と言えようか、とすると『婦人グラフ』はその頁数の割には極めて高価な雑誌と言えよう。『中央公論』が同じ1円であるのは、相当高度な、数少ない知識階級に読まれたためであろうか。ともかくも、『婦人グラフ』は裕福な階層の読者を客層に持っていたと考えられる。

各号38から40頁の内容は号によって多少の差異はあるものの、ほぼ以下の通りである。

国内外の絵画	2頁
風景写真(国内)	2頁
海外ファッションの紹介	4頁
着物ファッションの紹介	2頁
洋服の仕立て方	2頁
髪型(和風)	2頁
読み物(服装に関して)	4頁
手芸(和洋)	2頁
図案	4頁
インテリア	3頁
生け花	2頁
音楽、舞踊	2頁 (ない号もある)
報道	4～6頁
若い女性の紹介	6～8頁

全体としては若い女性のための比較的新しい高度な教養、ファッション、洗練された趣味に関する情報誌とみることができよう。しかし一方では内容の最後に挙げた「若い女性の紹介」には各号最も多くの頁を割いており、この雑誌の著しい特徴を成している。各頁に一人、ないしは2人の姉妹の姿が大きく掲載され、その殆んどは未婚であり、いわば結婚適齢期である。つまりこの記事は結婚相手を公に探し始めたことを公表する西洋の社交界デビューの観を呈している。

紹介されている女性の数は、第一巻（大正13年）-51名、第二巻（大正14年）-101名、第三巻（大正15～昭和1年）-95名、第四巻（昭和2年）-91名、第五巻（昭和3年）-125名、総数463名である。紹介文の内容は父親の身分・地位、本人の学歴、趣味、服装、インタビュアーの見た印象などである。それによれば多くが女学校出身、ないしは在学中で、芸事に秀で、玄人にも負けないほどの実力を持っているケースもある。ほとんどが卒業後も職業を持っている気配はなく、いわば専業の「令嬢」である。父親は公爵、伯爵、外交官、議員、政府高官、実業家、銀行家、大学教授、芸術家など、社会的地位が高いか、あるいは財産家である。本人の容姿、服装、趣味などの描写は、「浮世の駆け引きも知らないで育ったお嬢様」、「しなしなと夢二の画のように座って」、「あどけなく愛くるしい」、「つつましく咲く、清楚な水仙のような方」、「涼しいお目もと、すらりとしたお姿」と、あたかも見合い写真の説明のような美文であり、当時上流社会で花嫁として、あるいは妻として理想とされた女性像を物語っていると考えられる。

そこでこの理想的女性像の一端を把握するために、創刊号から終刊号までの紹介の頁に登場する令嬢たちの服装、髪型、趣味などについて、それぞれの回数を調査した。



図2 『婦人グラフ』 第五巻六号



図3 『婦人グラフ』 第四巻十一号

3. 髪型と服装

① 髪型（表1、グラフ1）

日本髪、束髪、断髪とに分けられる。

束髪は大日本婦人結髪改良束髪会という名のもとに結成されたグループにより衛生と軽便と経済を主意とした改良運動として明治18年に広められた。程なく鹿鳴館の洋装の貴婦人や東京女子高等師範学校を始めとする女学校生徒の髪型として採用された。洋装・和装のいずれにも調和し、しかも形式にとらわれることなく随意にまとめられる事から急速に広まり、明治23,4年ごろには一時的に衰退したが、やがて後期には再び大流行した。と同時に次々に新様式の束髪が考案され益々盛んになった。

大正後半になると定型を破り自由に、しかも個性を尊重した束髪が生まれている。大正8～9年ごろに「耳隠し」が広まり、10年ごろにはウェーブが広まり、ヴァリエーションが増えてきている。

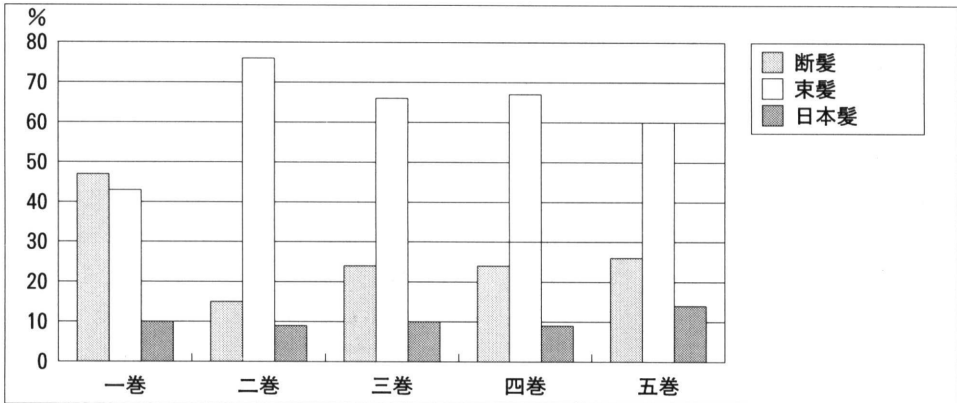
尚このように束髪はきわめて多様であり、日本髪に近い印象のものから西洋風を感じさせるものまで含まれる。後者を洋髪と呼ぶこともあろうが、ここでは長い髪を後ろで髷にまとめたスタイルを、前髪の扱いの如何を問わず、束髪として数えている。そもそも束髪は欧米女性の髪型に影響を受けたものであり、洋髪と区別することは難しいからである。

大正10年頃といえば、断髪、すなわちショートヘアは欧米ではすでに広まり、第一時次世界大戦後の風俗を特徴付けていた。我国でもこの頃から衛生上からも「断髪」が先端的流行となり、『婦人グラフ』誌の流行情報の頁にはしばしば登場している。

表1

	百分率 (%)					実数				
	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻
断髪	47	15	24	24	26	24	15	23	22	33
束髪	43	76	66	67	60	23	77	63	61	75
日本髪	10	9	10	9	14	5	9	9	7	17
対象者合計	100	100	100	100	100	52	101	95	90	125

グラフ1



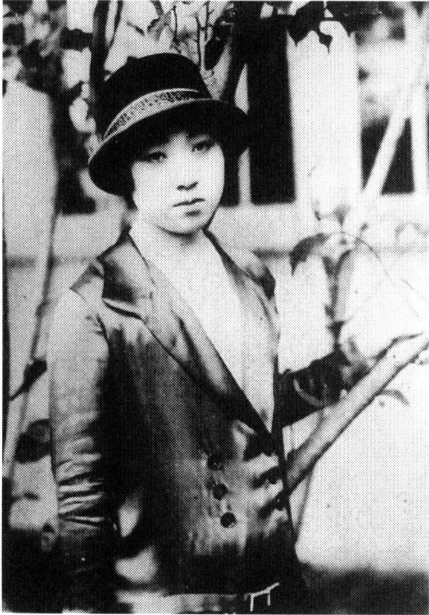


図4 『婦人グラフ』 第四卷十一号

くとも未婚女性にあっては、日本髪は普通の生活においては殆んど見られなくなっており、束髪が定着している観がある。

断髪は束髪に次いで第2位を常に保ち、全巻では25.3%を占めている。第一巻に最も多く、その後低迷している。また断髪は女学校在学中の少女、及び適齢期の女性と一緒に紹介されているその妹など、比較的若い女性の場合が多く含まれている。

以上のように、欧米でのショートヘアの流行、我国でのモダンガールに関する話題性に反して、断髪は比較的年少者においては普及したものの、束髪には遥かに及ばない状況であり、他方束髪は和服、洋服の両方の場合に用いられ、高い人気を保持していることがわかる。

② 和服と洋服 (表2、グラフ2)

断髪の場合と同様、洋服の占める割合は第一巻(大正13年)の33%以外は20%前後が多く、全巻の合計では21%である。大正12年以前の状況を把握していないため、過去との比較はできないが、少なくとも5年間の間に伸びる傾向は見られなかった。

また洋装は年少者に比較的多いのも、断髪の場合と同様である。断髪と洋服の組み合わせも一巻に多いが、これは流行の変化というよりも、時代の先端的雑誌作りを狙った編集の意図によるものと推測される。断髪・洋装は年少者、西洋音楽や洋画をたしなむ西洋文化を取り入れているタイプの女性、あるいはとても活発、活動的などと評される女性に多い。創刊に当たって、『アール・グー・ボーテ』を模倣した編集者がそうした女性に関心を寄せたのではないだろうか。しかしその後号を重ねるうちに、洋装・断髪の数が低迷していったのは、現実にはそうした「令嬢」が少なかったために、徐々に初期の方針に変更を加えざるを得なかったということではないだろうか。

表 2-1

	百分率 (%)					実 数					合計
	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	
断髪・和服	15.7	5.9	7.4	6.6	14.4	8	6	7	6	18	45
束髪・和服	41.2	67.3	55.8	64.8	56.0	21	68	53	59	70	271
日本髪・和服	9.8	8.9	9.5	7.7	13.6	5	9	9	7	17	47
断髪・洋服	31.4	8.9	16.8	17.6	12.0	16	9	16	16	15	72
束髪・洋服	2.0	8.9	10.5	2.2	4.0	1	9	10	2	5	27
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	51	101	95	90	125	462

グラフ 2-1

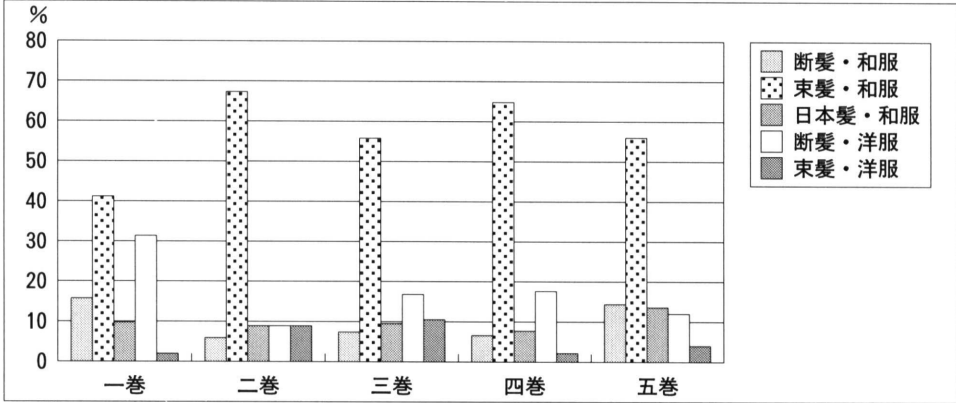
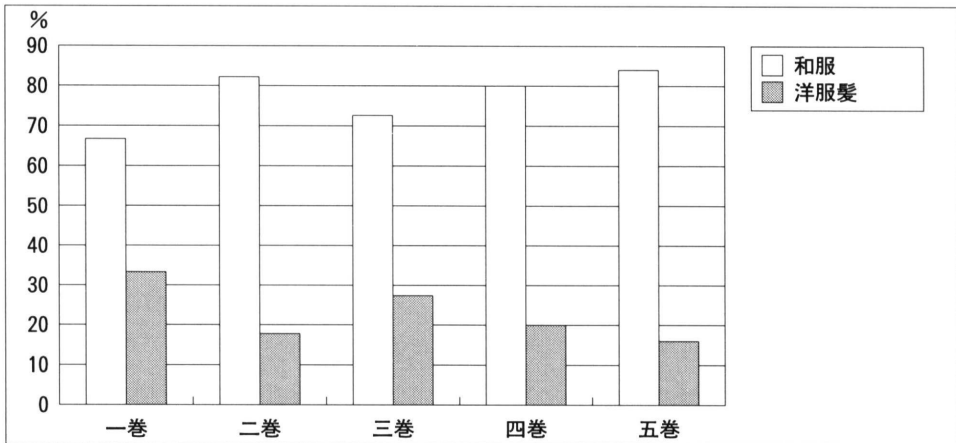


表 2-2

	百分率 (%)					実 数					合計
	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	
和服	66.7	82.2	72.6	80.0	84.0	34	83	69	72	105	363
洋服	33.3	17.8	27.4	20.0	16.0	17	18	26	18	20	99
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	51	101	95	90	125	462

グラフ 2-2



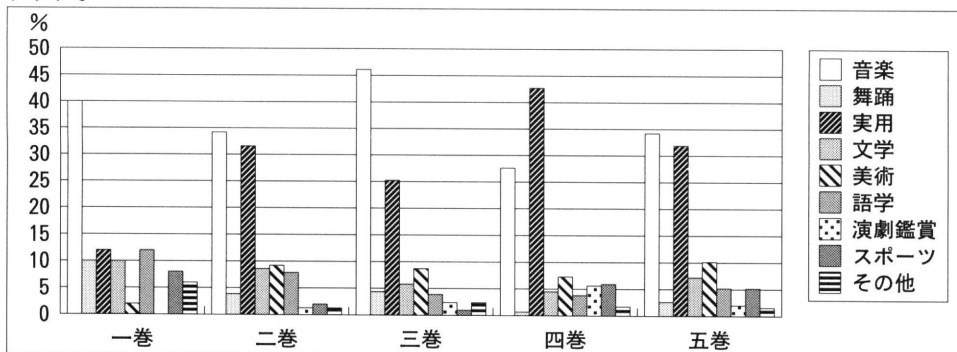
4. 趣味 (表 3、グラフ 3)

女性たちが挙げている趣味は多様であるが、音楽、舞踊、実用、文学、美術、語学、演劇鑑賞、スポーツ、その他に分類される。

表 3

	百分率 (%)					実 数				
	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年	T13年	T14年	T15年	S 2年	S 3年
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻
音楽	40.0	34.2	46.1	27.6	34.2	20	52	95	79	105
舞踊	10.0	3.9	4.4	0.7	2.6	5	6	9	2	8
実用	12.0	31.6	25.2	42.7	31.9	6	48	52	122	98
文学	10.0	8.6	5.8	4.5	7.2	5	13	12	13	22
美術	2.0	9.2	8.7	7.3	10.1	1	14	18	21	31
語学	12.0	7.9	3.9	3.8	5.2	6	12	8	11	16
演劇鑑賞	0.0	1.3	2.4	5.6	2.0	0	2	5	16	6
スポーツ	8.0	2.0	1.0	5.9	5.2	4	3	2	17	16
その他	6.0	1.3	2.4	1.7	1.6	3	2	5	5	5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	50	152	206	286	307

グラフ 3



音楽の中には、音楽鑑賞、洋楽器、和楽器、声楽や長唄、舞踊には西洋のダンス、日本舞踊、実用には裁縫、生花、茶道、料理、手芸など、文学には読書、和歌、短歌、詩歌などが含まれる。美術では絵画制作と美術鑑賞、書、習字が含まれる。演劇鑑賞には映画やお芝居・歌舞伎・オペラなどが、スポーツには水泳、テニス、乗馬、ゴルフなどがある。

この分類の結果、最も人気の高かった音楽と実用について、以下に詳細を述べる。

① 音楽 (表4、グラフ4)

音楽ではピアノ、長唄、琴、声楽が多く、年々増加の傾向にある。昭和2年に一時期若干減少傾向を示すが、昭和3年には、又伸びる傾向にある。その中でも邦楽では当初琴が最も多数であったが、大正15年以降長唄が琴を追い抜き、3年間トップの座にある。

長唄については同誌一卷一号に「家庭音楽としての長唄」というタイトルのもと、次のような記述が見られる。

「従来の日本音楽のうち、之が最も節調に上品なそして荘重な處があつて、其歌詞も外の音曲物に較べると余程卑猥な點が少ないからであります。それ故善良な家庭に於きまして是を演奏しましても少しも恥づる處はないと云う點が強味になっている譯であります。」⁴⁾

「是は長唄其ものが新時代に適應せる、音曲となつて來たと共に (中略) 是を劇場から離れた獨立した唄物として演奏會を起し、従来有名な曲種でも、卑猥な文句は訂正し、努めて上品なものを演奏すると云う事に盡したなどが、上流社会にも漸々流行を極める基となつたので

表 4

	百分率 (%)					実 数				
	T 13年	T 14年	T 15年	S 2年	S 3年	T 13年	T 14年	T 15年	S 2年	S 3年
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻
ピアノ	33.3	34.0	31.5	28.6	31.4	6	17	28	22	33
声楽	11.1	16.0	12.4	3.9	9.5	2	8	11	3	10
ヴァイオリン	0.0	6.0	1.1	3.9	3.8	0	3	1	3	4
長唄	11.1	16.0	22.5	27.3	25.7	2	8	20	21	27
謡曲	0.0	0.0	3.4	5.2	1.9	0	0	3	4	2
三味線	22.2	0.0	3.4	5.2	1.0	4	0	3	4	1
お琴	11.1	20.0	16.9	14.3	15.2	2	10	15	11	16
音楽鑑賞	11.1	8.0	9.0	11.7	11.4	2	4	8	9	12
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	18	50	89	77	105

グラフ 4

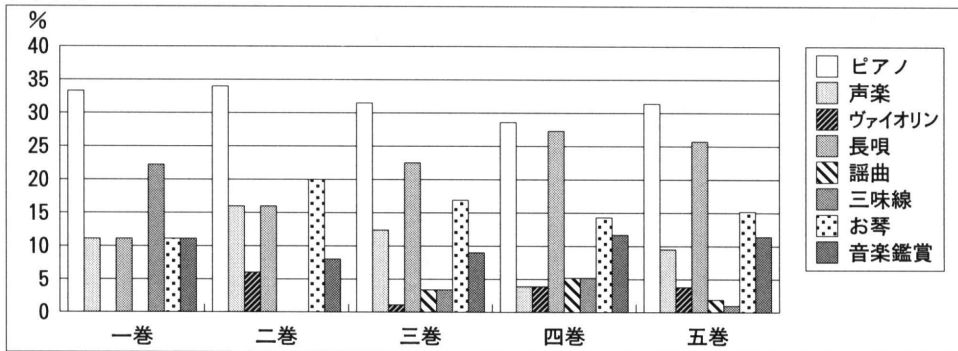
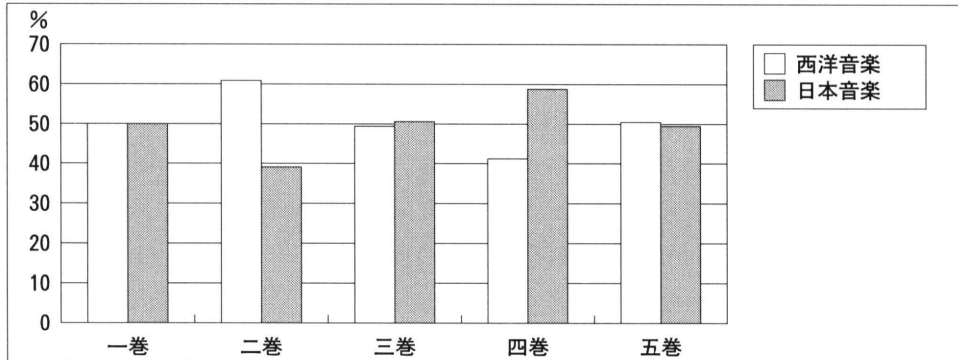


表 5

	百分率 (%)					実 数				
	T 13年	T 14年	T 15年	S 2年	S 3年	T 13年	T 14年	T 15年	S 2年	S 3年
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻
西洋音楽	50.0	60.9	49.4	41.2	50.5	8	28	40	28	47
日本音楽	50.0	39.1	50.6	58.8	49.5	8	18	41	40	46
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	16	46	81	68	93

グラフ 5



ありまして…後略…」⁵⁾

長唄は新時代に適応し、上品な物になったことが、上流社会への浸透につながったとしているのである。

邦楽では長唄に続いて多いのは琴である。

他方西洋音楽に目を向けるとピアノが圧倒的に多く、2番目に声楽、ヴァイオリン等と続く。

西洋音楽と邦楽とに二分してみると、西洋音楽は徐々に伸びて大正15年に邦楽を抜き、昭和2年に若干減少しているものの翌昭和3年には大正15年より増加している。(表5、グラフ5)

② 実用 (表6、グラフ6)

表3とグラフ3に見られるように、大正14年以降華道・茶道・料理・裁縫・手芸すべてが趣味全体の中で増えてきている。華道、茶道は実用の中でも、料理、手芸、裁縫に比べると芸術的、儀礼的要素が強い分野であることは言うまでもない。5年間に前者二つが後者三つを常に凌駕していたのは、階級的特徴といえよう。



図5 『婦人グラフ』 第四巻八号

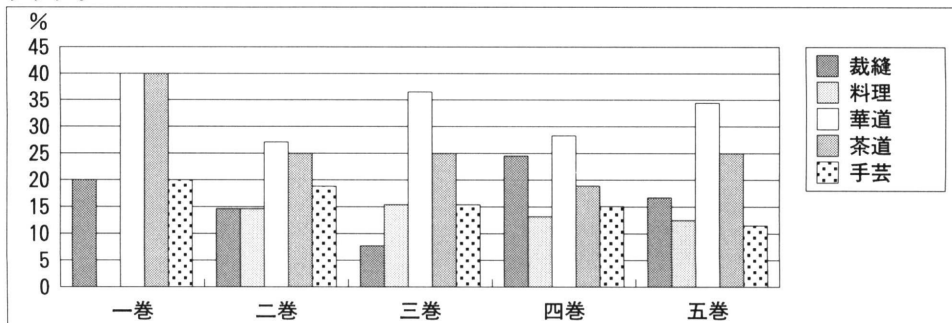
またこの実用的趣味の分野に洋風のものよりも日本の伝統的なものが根強くみられることも一つの特徴である。モダンガールという言葉の流行した時代であったが、現実には日本古来の花嫁修業の様相が強く感じられるのである。

③ その他 (表3、グラフ3)

文学、語学、美術は常に類似した数値を示しているが、美術が年を追って増える傾向にあるのに対して、文学と語学は減少傾向を示している。ことに語学の減少は著しい。

表6	百分率 (%)					実数				
	T13年	T14年	T15年	S2年	S3年	T13年	T14年	T15年	S2年	S3年
	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻	一卷	二巻	三巻	四巻	五巻
裁縫	20.0	14.6	7.7	24.5	16.7	1	7	4	26	16
料理	0.0	14.6	15.4	13.2	12.5	0	7	8	14	12
華道	40.0	27.1	36.5	28.3	34.4	2	13	19	30	33
茶道	40.0	25.0	25.0	18.9	25.0	2	12	13	20	24
手芸	20.0	18.8	15.4	15.1	11.5	1	9	8	16	11
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	5	48	52	106	96

グラフ6



スポーツは全体の中では演劇鑑賞に続いて少ない。

6. まとめ

『婦人グラフ』にみる令嬢は女学校卒業後、家庭において稽古事、趣味、花嫁修業などに専念しており、その趣味の筆頭はピアノ、長唄、琴などの音楽であり、次第にピアノなどの洋楽に傾く傾向が見られる。花嫁修業を兼ねていると思われる華道、茶道、裁縫、料理などには日本の伝統的分野が多数を占めている。服装では束髪に和服着用という傾向が見られ、洋装やショートヘアは20%前後にとどまっている。

こうした調査結果には大正末期から昭和初期にかけての現実の上流社会における理想的女性像としては、1920年代欧米社会の一つの風潮をなしたモダンガール風の意識はあまり見られず、むしろ欧米の19世紀ブルジョワ社会的価値観を感じさせる。また服装は依然、あくまでも和装姿である。冒頭に触れた拙稿において、絵画には欧米風の脚長のプロポーションが明治40年代から現れ始め、脚長を演出する着物の仕立て方や着付けに関する意識が大正期に明瞭になったことを指摘したが、洋装に移行できない、踏み切れない「令嬢」に対する社会の価値観が、和装の中に欧米風美意識を育むという転嫁の現象を生んだものと考えられる。

なお上述のように、若い女性の紹介文には美辞麗句が連ねられているが、それらの中で目立つのは「淑やか」、「お優しい」、「楚々として」、「奥ゆかしい」、「つつましく」などの控えめな様子を表わす言葉と、それらに対照的な「近代的なハキハキした」、「快活な」、「明るい」、「現代的な」などの能動的な様子を表わす言葉である。今後はこれらの言葉と服装や髪型との関係をより精密に分析して行きたい。

今回の研究対象である『婦人グラフ』の多くは武蔵野音楽大学図書館にて閲覧させて頂きました。末筆ながらここに記して、ご好意に深甚なる謝意を表します。

註

- 1) 拙著『近代日本女性和装の変遷 ―絵画に描かれた和装女性のプロポーションと裁縫教科書に見る寸法―』東京家政大学博物館紀要第7集 2002年2月 p.147~163
- 2) Art Gout Beaute; feuillets du l'elegance feminine, 1920-1933, Paris, A.A.Godede
- 3) 週刊朝日編『値段史年表 明治大正昭和』朝日新聞社 1988年 p.101,90,111,161,67
- 4) 5)『婦人グラフ』国際情報社 一卷一号 1924年